

病み抜けし

能村 研三

「春ひとり」の句の軸装

鴉亭の床の間は、正月になると父の時代は大方師である水原秋櫻子揮毫の軸を掛けていたが、私の代になつてからは父登四郎の句の軸装を掛けることにしている。

今年は「春ひとり」槍投げて槍に歩み寄るの軸を掲げた。と言っても登四郎は生前軸装のために「春ひとり」の句を揮毫していない。句碑に刻むために書いた紙が残っていたが保存状態が極めて悪く、二枚の紙をセロテープで繋ぎ合わせたものであった。一部は書いた字に糊がついてしまった形跡もあるが、処分することなくかろうじて残っていたので、日本橋にある小津和紙の西本さんに相談してみた。

小津和紙は「沖」の記念大会の折に色紙短冊の複製や記念品などでお世話になつている会社で、江戸時代に松阪から伊勢商人として日本橋に店を出した老舗である。昨年、私は松阪の小津本家である「旧小津清左衛門家」も訪ねたこともあり、最も信頼を置いている店である。

奔放な枯れぎま讃ふ大蓮田
働いて働いて落葉散り尽くす
ことごとく枯れても我は枯れ遅る
ねんごろに樹齢を磨く北おろし
漣々と誰憚らぬ朴落葉
原稿の桁目がいびつ憂国忌
小銭しか持つてはをらず煤逃げす
白鳥のまづ長頸が沼に着く
着膨れてゐて靴音の変はりけり
したたかに病み抜けし年北吹けり

西本さんは、江戸表具職人の石井弘芳さんを紹介してくださつた。石井さんは石井三太夫表具店の十五代目、三百五十年以上続く老舗の表具店で、「沖」創刊五十五周年の記念大会の折り、会場に飾らせていただいた、「川を生む山の力や幟立つ」の軸装もお願ひした方である。

今回はあまりにも保存状態がよくない「春ひとり」を書いた紙を見て、何とかしようと言つて引き受けていただいた。

暮に、見てほしいとのことので伺つたところ、見事な軸装が出来上がった。掛軸のポイントとなる一文字は金襴の裂地で、表具の良し悪しが決まる中廻しは、深緑の唐草模様で仕上げられている。字の上の糊のあとは大分薄まったものまだ残っているが、立派な幅広の掛軸となつた。

「春ひとり」の句は父の代表句でもあるので、これからも大切に保管していきたいと思つている。

能村 研三